

【論考】

SEAMEO RIHED による大メコン圏大学コンソーシアム 能力向上支援プロジェクト

The Project on Support for Capacity Building of the Grater Mekong
Sub-region University Consortium by SEAMEO RIHED

東南アジア教育大臣機構高等教育開発地域センター 小嶋 緑

KOJIMA Midori

(Senior Programme Officer and JAIF Project Manager, The Southeast Asian Ministers of
Education Organization Regional Centre for Higher Education and Development)

キーワード：東南アジア、大メコン圏、大学コンソーシアム、海外の大学との交流

はじめに

2018年7月、東南アジア教育大臣機構高等教育開発地域センター（Southeast Asian Ministers of Education Organization Regional Centre for Higher Education and Development、以下、SEAMEO RIHED）は、日・ASEAN 統合基金（Japan-ASEAN Integration Fund、以下、JAIF）の支援を受け、大メコン地域の大学コンソーシアム能力向上支援プロジェクト（The Project on Support for Capacity Building of the Grater Mekong Sub-region University Consortium、以下、GMS-UC 能力向上支援プロジェクト）を始動させた。本稿では、SEAMEORIHED 及び同プロジェクトの活動等について紹介し、東南アジアや大メコン圏の高等教育連携の展望について考えたい。

1. SEAMEO と SEAMEO RIHED

東南アジア教育大臣機構（Southeast Asia Ministers of Education Organization、以下、SEAMEO）は1965年に東南アジアの国々の政府により、教育・科学・文化における地域協力の推進を目的とする国際機関として設立された。現在はブルネイ・ダルサラーム、カンボジア、ラオス、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナムの11カ国が加盟、23のセンターと1つの事務局を持つ。域外の国でも、準加盟国やパートナー国として協力関係を結ぶことが可能で、日本政府は1970年代以降、後者の立場をとっている。その他に機関レベルでも

提携機関 という立場を持つことが可能で、日本では筑波大学が提携機関となっている。SEAMEO 事務局は UNESCO バンコク事務所と同じ建物内に置かれており、ネットワークやパートナーシップの構築、政策関係者や専門家によるフォーラムの提供、持続可能な人材育成等を通じて、地域の理解、協力、目標の調和推進等の活動に取り組んでいる。

一方の SEAMEORIHED は、名前の通り高等教育開発に特化したセンターである。もともと RIHED は SEAMEO 設立以前の 1959 年に「The Regional Institute of Higher Education and Development」として、国際連合教育科学文化機関（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、以下、UNESCO）と国際大学協会（International Association of Universities、以下、IAU）によりシンガポールで創設された。高等教育の研究機関として活動してきたが、SEAMEO の発足等を受け、域内での議論を経て、1993 年 2 月に SEAMEO の 1 センターとして正式に再編、以来タイのバンコクに拠点（タイ教育省高等教育委員会事務局ビル内）を置いている。この再編の際に、組織名を Institute から Centre に一部変更したものの、略称はそのまま RIHED を使用している。

地域開発のため、高等教育における理解、協力、相乗作用を促進するダイナミックかつ戦略的、政策研究主導のセンターであることをビジョンとして掲げ、政策プラットフォーム、政策主導の研究、情報配信範囲の拡大等によって地域の高等教育制度の連携、アラインメント、発展の促進を使命とする。5 か年開発計画でより具体的な活動方針を定めており、現在は「第 5 期の 5 か年開発計画(2017-2022)」により「アラインメントと開発」「協力と相乗効果」「研究」「情報ポータル」の 4 領域を柱に、活動にあたっている。SEAMEO RIHED が果たす重要な役割は、地域の国際機関として、政府間の高等教育連携・政策対話のプラットフォームを形成・提供していること、大学ネットワークの形成と促進を通じ、地域高等教育開発に貢献していることだろう。前者の重要性は、同地域の別組織である ASEAN 事務局の機能、例えば国際会議等と比較するとより明らかだ。ASEAN は ASEAN 教育大臣会合（ASEAN Education Ministers Meeting）を隔年で、そのための高級実務者会合（Senior Official Meeting）を毎年開催しているが、インドネシア、マレーシアのように高等教育とその他の教育（初等中等教育、職業教育等）を所管する省が異なる国（タイでも現在省庁再編が進められており、高等教育委員会事務局は科学技術と統合される予定）を中心に、これらの会議に出席する政府関係者の多くは、高等教育以外の担当者である。一方の RIHED は、Southeast Asian Higher Education Senior Officials Meeting (SEA-HiEd SOM) と呼ばれる、東南アジア地域高等教育高級実務者会合を毎年春に開催している。加えて、毎年秋に開催される RIHED の運営委員会には各国の高等教育局や省の要人が委員として名を連ねる。このように少なくとも年に 2 度、高等教育担当の高級実務者が集まり、域内の高等教育政策に関して意見や情報を交換する対話の場・機会を持っているのである。以上の背景から、SEAMEO RIHED は域内各国政府の高等教育担当省・局等と強いネットワークを形成していると言えるだろう。筆者が事務所で仕事をする中でも、各国政府の担当者との密な関係を日々目の当たりにしている。

域内大学ネットワークに関するRIHEDの活動のうち、日本で知名度が高いのはAIMSプログラム(Asean International Mobility for Students Programme)であろう。2010年から開始されたマレーシア、インドネシア、タイの3カ国によるM-I-Tプログラムをパイロット事業として前身に持つ、政府主導の域内学生交流事業だ。もともとはSEAMEO加盟国による東南アジア域内の事業だったが、現在は範囲を拡大し、日本(2013年)と韓国(2016年)も参加をしている。日本の加盟の際は、文部科学省が「大学の世界展開力強化事業～海外との戦略的高等教育連携支援～AIMSプログラム」を通じてAIMSプログラムへの参加大学を募り、国として東アジア地域の学生交流の促進に努めた。現在は8つの国、10の学問分野、69の高等教育機関が参加し、これまでに2,400人以上の学生がプログラムを終了した。

以上のように、SEAMEO RIHEDは政府間連携・政策対話のプラットフォームとしての機能と、大学間ネットワークを通じた学生交流プログラムの実施機関としての機能を併せ持った組織であり、政策立案者、大学幹部、教員、職員、学生をつなぎながら、東南アジア地域の高等教育の発展に資する活動を日々行っている。

2. 大メコン圏大学コンソーシアムの背景

大メコン圏大学コンソーシアム(Grater Mekong Sub-region University Consortium、以下、GMS-UC)はメコン川の流域6カ国、すなわちカンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム(CLMV)、及びタイ、中国(特に雲南省、広西チワン族自治区)のGMS-UC加盟大学の学長等が、2015年7月、ラオスのヴィエンチャンに集まり共同宣言「The Joint Declaration of GMS University Consortium for Collaboration and Excellence」に署名し、正式に発足した。SEAMEOの7つの優先分野の1つであり、SEAMEORIHEDが担う「高等教育機関間のネットワーキング強化や大メコン圏及びその他地域における高等教育の調和化促進の手段としての高等教育及び研究に関する協力の推進」の一つの取り組みとして、アジア開発銀行(Asian Development Bank、以下、ADB)の「GMS人的資源開発戦略枠組み及び行動計画:2013-2017(Strategic Framework and Action Plan for Human Resource Development in the Greater Mekong Subregion:2013-2017)」に沿って、2015年から2017年にADBの資金支援を受けた。CLMVの高等教育機関の能力開発により域内の格差是正や調和化を進めたいSEAMEO RIHEDと大メコン圏の経済回廊開発¹とそのための人材育成を進めたいADBとの目的が一致しGMS-UCが構想された形だ²。特に単位互換の分野での協力が期待され、SEAMEO RIHEDが実施主体となり、先だって行われた域内の学生移動と単位互換制度に関する実態調査・研究結果をもとに、大メコン圏の高等教育の調和化を促進するための能力強化ワークショップ等が実施されることとなった。

¹ 国境を跨ぐ幹線道路のインフラ整備等を通じて、国境横断的な経済協力強化や貧富の格差解消を目指すもの。1990年代からADBが中心となって進めるGMS経済協力プログラムの重点分野。(小笠原2005)(安永・武谷2014)

² GMS-UC発足の経緯と背景やその目的については、当時ADBのGMS人的資源開発を担当していた、廣里恭史上智大学教授による(Hirosato2014)及び(廣里2016)を参照。

2015年の共同宣言では、コンソーシアムの目指すところとして、GMS地域のコミュニティ、連結性、競争力を向上するため、人材育成の必要性を認識しながら、大学の質・卓越を促進するメカニズムの構築を模索することが謳われている。具体的な協力分野としては、大学ガバナンスとマネジメントの改善、単位互換等を含む国際化の促進、質保証の強化・発展、研究協力の促進、英語による情報提供の奨励等が挙げられている。

GMS-UCは国境を越えた地域レベルの大学コンソーシアムということから、日本で見られる大学コンソーシアムの例とはやや性質を異にしているかもしれない。例えば加盟大学は、大学による自主的な参加ではなく、各国の教育省によって選出された。ADBの「GMS人的資源開発戦略枠組み及び行動計画」では、大メコン圏の経済回廊を軸とした支援が意識されているが、実際の加盟大学選出においては、各国政府やSEAMEO RIHEDそれぞれの考えがあり、現在の形に落ち着いたようだ。従って、現在も大学の自主的な連合というよりは、政府の支援の下で進められる地域連携という色合いが強い。

GMS-UCの具体的な活動としては、キックオフと同時に始まった「アジア学術単位互換枠組み(Academic Credit Transfer Framework for Asia、以下、ACTFA)」プロジェクトが大きい。日本から広島大学の堀田泰司教授の協力を受け、GLMVとタイを対象に単位互換に特化したワークショップの開催などを通じて、主要な単位互換システムやスキームを包括する共通の単位互換フレームワークの構築が目指された³。

3. 日・ASEAN統合基金(JAIF)とGMS-UC能力向上支援プロジェクト

JAIFは2005年12月に開催された日・ASEAN首脳会議において、当時の小泉総理大臣がASEAN統合への支援のため、75億円の拠出を表明したことに始まる。東アジアの地域協力において中心的な役割を果たすASEANが目指す共同体形成への支援を行い、ASEANの結束を強化することは、東アジア全体にとっても有益との考えからである。翌年3月、当時の麻生外務大臣やASEAN各国の大使等の立ち合いのもと、東京で基金設立の署名式が開催されて以降、これまでに様々な分野の組織や形態で支援が実施され、ASEAN域内の開発格差の是正等に貢献している。

2015年からのGMS-UCの取り組みをさらに発展させるため、関係機関との様々な準備・調整を経て、2017年5月SEAMEO RIHEDによるGMS-UC能力向上支援プロジェクトへのJAIF支援申請が正式に提出された。これはASEAN(各国政府と事務局)及び外務省の審査を経て、同年12月に承認された。プロジェクトはマネージメント・リーダーシップ、教育、研究、調和化・国際化、国境を越えた教育という5つの分野で能力強化に取り組む。ASEAN内の格差是正支援を目的とする基金の性質上、プロジェクトはGMS-UCの中でもASEAN加盟国の大学のみを対象とした支援となっている。2018年にプロジェ

³ ACTFAは、単位互換以外に、域内の教育の質に関する相互認証、成績評価の互換、これらの互換を円滑に行う方式並びに制度、といった四つの「柱」について、域内共通の概念を形成しようとするもの(堀田2016)。

クトが開始するにあたり、新しくラオスの大学が2大学（Champasak University 及び Souphanouvong University）加わったため、現在は22大学が参加している（表1）。

表1. GMS-UC能力向上支援プロジェクト参加校

国	参加校名
カンボジア	Royal University of Phnom Penh University of Battambang Svay Rieng University Chea Sim University of Kamchaymear
ラオス	National University of Laos Savannakhet University Champasak university Souphanouvong University
ミャンマー	East Yangon University Myeik University Yenanchaung Degree College Yadanabon University
タイ	Chiang Rai Rajabhat University Suan Sunandha Rajabhat University King Mongkut' s University of Technology, Thonburi Thammasat University Kasetsart University Mae Fah Luang University
ベトナム	Thuyloi University (Water Resource University) University of Transport and Communications Hue University Vientnam National University of Agriculture

プロジェクトの実施期間は、フェーズ1として2018年1月から2019年12月までの2年間である。2018年はこれまでに、専門家によるプロジェクトの詳細設計、参加大学への事前調査、新プロジェクトとしてのキックオフ兼学長フォーラム、マネージメント・リーダーシップ能力向上ワークショップ、教育・研究能力向上ワークショップ等を行ってきた（2018年9月時点）。GMSの中では、タイの大学が比較的先進的

である実態を鑑み、タイの専門家や大学からの参加者がメンターとして他国を率いる役割を担っている。また、メコン地域との高等教育協力を長く携わって来られ経験豊富な日本人専門家にもプロジェクトを支えていただいている。具体的には、以下のようなプロジェクト進捗を見ている。

2018年7月20-21日、SEAMEO RIHEDはGMS-UC能力向上支援プロジェクトのキックオフと第1回GMS-UC学長フォーラムをバンコクにて開催した。参加大学の学長達とCLMV及びタイの政府高官に加え、日本の文部科学省、ASEAN事務局、SEAMEO事務局、SEAMEOの他センター、ASEAN大学連合（ASEAN University Network、以下、AUN）、UNESCO、日本学術振興会等の連携機関も御招待して大々的にプロジェクトを始動させた。フォーラムでは、急速な時代の変化を念頭に置いた大学マネジメントの必要性について基調講演や戦略的行動計画に関するワークショップ等を行った。フォーラム2日目には、参加大学により、プロジェクトへのコミットメントを示す共同声明が採択され、署名式が行われた。





学長フォーラム以降は、大学幹部層を対象としたリーダーシップ、マネージメント、教育、研究、国際化、国境を越える教育等、分野別のワークショップを通じて、各大学が抱える分野毎の課題の明確化と改善のための行動計画づくりに力を注いできた。その過程において、関連分野で活躍される方の講演や地域の大学の優良事例共有なども取り入れた。講演や事例紹介での内容を踏まえ、SWOT分析等

を用いた大学の現状分析を行ってもらい、その後、国毎のプレゼンテーション、ギャラリーウォークやワールドカフェ等の手法を用いて、国家の枠を越えた対話、気づき、共有、相互フィードバック、議論等を促進する。優先して取り組む課題を決め、戦略行動計画を策定、2年目に進捗を見る予定である。

4. 今後の展望

一言で ASEAN や GMS と言っても、それぞれの国の高等教育情勢は大きく異なる。加えて、一つの国の中でも、規模や立地等により大学がおかれた状況は多様である。例えば、既に 300 以上の高等教育機関を持ち、進学率が 50% を超えるタイの首都バンコクにある大学と、大学が 5 校しかなく、教員の多くが学士号のみの取得者というラオスの地方大学であれば、大学が直面する課題に差があることは想像可能だろう。このような参加校の多様性は、プロジェクト開始に当たって実施した事前調査においても明確に見られた。ワークショップのコンテンツ設計等で難しさがあるものの、一方で有効活用の可能性もある。実は、どのワークショップでも一番活発化するのには、参加大学同士のインタラクティブなセッションだ。相互質問や意見交換がなかなか止められない状態になる。特に各国の地方大学からの出席者にしてみれば、近隣国の大学人と意見交換をする機会さえ、まだまだ限定的なのであろう。様々な角度から、各々の参加者が自大学のためになる学びや気づきを得ていただきたいと考えている。

また、このような時間外も含めた参加者同士の交流を通じて、将来的に大学間の共同研究や学生交流プログラムの構築が生まれることを期待している。現在のフェーズでは、参加大学の多様な現状を踏まえ、まずは各々の大学レベルでの能力向上に焦点を絞り、課題の明確化や解決に向けた行動計画の策定・実行の推進等を行っているが、将来的には国境を越えた地域コンソーシアムという特性を生かし、地域間・大学間協働で次世代の人材育成を担えるようなコンソーシアムに発展していくことが期待される。

本プロジェクトによる資金支援は、ワークショップ等を通じた大学の幹部層の育成に限定されるため、大学が何か新たに取り組みを開始したいとなったとき、その取り組みに充てる予算確保が別の課題となる。これについては、各大学の自助努力が否めないため、各種団体や政府による基金等、資金

支援の活用の可能性をヒントとして提供もしている。

地域柄、政府による大学への影響力が強く、大学が自らの裁量で決められる物事に限界がある国も多い。これらの国では、行政官による高等教育を取り巻く国際状況への対応の必要性を十分に理解していただく必要があるため、プロジェクトへの各国政府の巻き込みも重要である。

GMS-UC プロジェクトの参加大学は地域の大学のごく一部だが、大学レベルでの能力開発のモデルとして、また地域連携のモデルとして、大メコン圏やASEAN 地域全体に影響を与えていくことを目指したい。今後、大メコン圏における経済回廊の整備・発展が進行すると同時に、ますます地域の連結性の高まりが予想される。とくに後発国の高等教育機関が、人材育成の面でGMSに影響を与えることが期待される。

一方、ASEAN やGMS 地域には、GMS-UC 能力開発支援プロジェクトの他にも様々な機関や枠組み、ネットワークによる活動が存在しているため、それらが相互補完できるよう、機関間連携や情報交換を行うことも重要と考えられる。また、プロジェクト参加大学の能力強化を基盤とした、将来的なAIMS プログラムへの加盟国増（カンボジア、ラオス、ミャンマー）の推進や、日本主導の「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」による「ASEAN+3 学生交流及び流動性に関するガイドライン (ASEAN Plus Three Guidelines on Student Exchanges and Mobility)」(2016年5月ASEAN+3教育大臣会合採択)及び2018年秋のASEAN+3教育大臣会合において採択が見込まれる「ASEAN Plus Three Guidelines on Transcripts and Supplemental Documents for Academic Record of Exchange Students」の域内での普及・活用などを通じて、中・長期的なアジア地域の高等教育圏形成を視野に、地域連携による実質的な活動の蓄積が期待される。関係各国、GMS-UC 加盟大学、SEAMEO RIHED による一層の取り組み強化が望まれる所以である。

※本稿は個人の見解を含むものであり、所属する組織の公式見解ではありません。

<参考文献>

- ・アジア開発銀行 (2013) 「Strategic Framework and Action Plan for Human Resource Development in the Greater Mekong Subregion: 2013-2017」
- ・外務省ウェブサイト「日・ASEAN 統合基金 (Japan-ASEAN Integration Fund (JAIF))」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/j_asean/jaif.html (2018年9月9日閲覧)
- ・JAIF Japan-ASEAN Integration Fund ウェブサイト
<https://jaif.asean.org/index.html> (2018年9月9日閲覧)
- ・文部科学省ウェブサイト「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1341803.htm (2018年9月9日閲覧)
- ・SEAMEO ウェブサイト「What is SEAMEO?」

http://www.seameo.org/SEAMEOWeb2/index.php?option=com_content&view=article&id=90&Itemid=518 (2018年9月9日閲覧)

- ・SEAMEO RIHED ウェブサイト <https://rihed.seameo.org/about-us/history/> (2018年9月9日閲覧)
- ・SEAMEO RIHED (2017) 「The Fifth Five-Year Development Plan, FY2017/2018-FY 2021/2022 July 1-June 30」.
- ・SEAMEO RIHED (2017) 「Annual Report 2016/2017 -Your Partner in Higher Education-」.
- ・小笠原高雪 (2005) 「メコン地域における開発協力と国際関係」石田正美編著『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』：日本貿易振興機構アジア経済研究所、41-62頁.
- ・小嶋緑 (2017) 「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」の活動と「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」ウェブマガジン『留学交流』、2017年4月号、Vol. 73, 1-6頁.
- ・杉村美紀 (2017) 「アジア高等教育圏のダイナミクス」『カレッジマネジメント』204/May-June, pp. 52-55.
- ・Hirosato, Yasushi (2014) 「Subregional Collaboration in Higher Education: Harmonization and Networking in the Greater Mekong Subregion」 In A. Yonezawa, et. al. (Eds.). *Emerging International Dimensions in East Asian Higher Education*. London: Springer, pp. 145-165.
- ・廣里恭史 (2016) 「国際協力」田中治彦、三宅隆史、湯本浩之編著『SDGs と開発教育—持続可能な開発目標のための学び』東京：学文社、114-134頁.
- ・堀田泰司 (2016) 「学生流動性政策と単位互換制度—欧州の「共に学ぶ」学生交流事業とアジアの挑戦」松塚ゆかり編著『国際流動化時代の高等教育—人と知のモビリティを担う大学』京都：ミネルヴァ書房、173-195頁.
- ・安永英資, 武谷由紀 (2014) 「メコン地域の経済回廊について (前篇)」『日経研月報』2014年6月号.